

グループ学習を取り入れた韓国・朝鮮語のリーディング授業の実践報告

林 河運

1. はじめに

本研究の目的は、林 (2014) のグループ学習を取り入れた韓国・朝鮮語の「文法」授業での結果¹を参考にし、「読む・書く」の授業でもグループ学習をすることによって、学習者の学習意欲の向上と、授業の活性化につながるかどうかを検討することである。

2. 研究の対象

本研究に望ましい研究対象として、(1) 学生が韓国・朝鮮語Ⅰの履修者であること、(2) 本研究者の韓国・朝鮮語Ⅱの授業を受講していること、などの条件を満たす必要がある。特に、(2) に関しては、他の指導者の授業方針の影響が大きいため重要である。これらの条件を満たすクラスとして、島根大学で本研究者が担当している2013年度後期韓国・朝鮮語Ⅱ読む・書くクラス(3クラス)を選んだ。クラスの人数は、木曜日の2限目クラス41名、木曜日の3限目クラス41名、金曜日の3限目クラス32名である²。つまり、3クラス合計で114名である。学年別には、一回生、二回生と三回生、四回生がそれぞれ101名、9名、2名、2名である。

また、島根大学では初修外国語としてドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語から一つ選択し、卒業するまで4単位³を取得すれば卒業できることになっている。そのうち韓国・朝鮮語Ⅰは、一回生の前期に週2回、計60時間2単位で、統一テキストを使用し、読む・書く・聴く・話すという4技能のバランスのとれた初修外国語の運用能力の基礎を身につけることを目的としている。韓国・朝鮮語Ⅱは、一回生の後期に週1回30時間1単位の授業を2科目、計2単位取らなければならない。なお、学生が授業を選べるカリキュラムとなっていて、前期成績発表時に受講したいメニューの希望調査をし、クラス編成を行っている。現在実施しているメニューは、①文法②読む・書く③総合(前期の総合基礎を引き継ぐ授業内容)④検定対策⑤会話⑥聞くの6つである。そのうち、本研究者が担当しているメニューは、「文法」と「読む・書く」⁴のメニューである。そのうち、今回は林(2014)の結果を踏まえて「読む・書く」の授業を考察することにする。

¹「グループによる学習」を韓国・朝鮮語の「文法」の授業に取り入れておこなってみた結果、改善すべきものは多少あるものの、教室を活気づけることに貢献する傍ら、ゲーム感覚で楽しく友達と協力しながら自発的に学習できることが確認されたと報告している。詳細は、林(2014)「韓国語学習者の意欲向上を目的とする学習法の試みとその検討—グループによる学習に注目して—」をご覧ください。なお、4節から10節までの内容は林(2014)のところに述べた内容であるが、便宜上修正加筆をし改めて述べた内容が多々あることを断っておきたい。

² 授業者名簿に登録している名簿のうち、登録するだけで一度も出席していない学生、授業の途中から来なくなった学生、中間試験が終わって来なくなった学生、アンケートを取るとき欠席した学生、アンケートをまともに答えていない学生はその人数の中に含まれていない。したがって、実際に受講している学生のうち、アンケートをまともに答えている学生だけの人数である。

³ 全学部ではなく、医学部と生物資源学部は卒業するまで2単位取得すればよい。

3. 授業の方針と具体的な進め方

3.1 授業の方針

まず、韓国・朝鮮語Ⅱ（読む・書く）の授業方針を簡単にまとめると以下のとおりである。

- ①初級段階では学問より学習意欲を重視する。
- ②分かりやすく楽しい授業を心掛ける。
- ③授業の中心は初級段階での基本的な文章の解釈と理解のスキル向上に置く。
- ④その日に出てくる文法事項のうち、解説を行わなければいけないものは単語テストが終わった後、15分以内に行う。
- ⑤授業中に出来なかった質問とか気になる所があるときは、その都度シャトルカード（学生と教員の間の双方向性の授業の確立を目的に用いるカード）を提出してもらい、瞬時にフィードバックしていくことを心掛けている。これは、授業に対する学生の反応や理解度を確認する方法として、非常に有効であると考えている。
- ⑥授業中、教科書だけに頼らず、パソコンを使ったPPT資料を用いて、日韓の文化の違い、現代社会事情等を紹介したり、K-POPの歌を紹介したりする。これらすべて学生の韓国・朝鮮語に対する学習意欲を引き出すことを目的とするものである。

3.2 授業の具体的な進め方

①スマートフォンの辞書アプリ⁵が必要となるので、一回目（オリエンテーション）の授業の時にアプリのダウンロードとハングルの入力ができるようにキーボードの設定を行う。その際、スマートフォンを持っていない学生に対しては、各自が持っている電子辞書を使うか、それとも授業者が持っている紙辞書（4冊）と電子辞書、そしてiPadなどを貸して対応する。ハングルの入力ができるように設定する方法の詳細は以下のとおりである。写真のところの社名などは消してある。

「スマートフォンの場合」

アンドロイドの場合

入力用のアプリ「Google Korean IME」か「Google Korean Input」をインストールして、文字入力の設定をする必要がある。

1. 「Google Play」のページ内で、「Google Korean IME」を検索してタップする。
2. ダウンロードの画面で「同意してダウンロード」をタップするとインストールが開始される。
3. インストールの後、ホーム画面から「設定」をタップする。
4. 「言語とキーボード」の中の「文字入力設定」で「Korean Keyboard」をタップすれば

⁴ 韓国・朝鮮語Ⅱの場合は韓国・朝鮮語Ⅰと違って統一テキストではなく、各教員が自由に決めてやることになっている。

⁵ 2013年12月18日までは「NAVER韓国語辞書（iosとAndroid両方対応）」という辞書アプリを利用してしたが、サービス終了に伴って、現在はNAVER Corp. から出ている「Naver Dictionary」という辞書アプリに切り替えて利用している。

OK。

*機種によって一部異なる場合があります。詳細は、以下の写真を参照してください。



iPhone の場合

キーボードの設定をする必要がある。

1. ホーム画面の「設定」をタップし、「一般」を背託する。
2. 「キーボード」→「キーボード」をタップする。
3. 「新しいキーボードを追加」をタップし、「韓国語」と「標準」をタップすればOK。

* OS のバージョンによって一部異なる場合があります。詳細は、以下の写真を参照してください。



②必ず、授業スタート 10 分前に教室に入る。なぜならば、学生の人数が約 40 名程度いるため、プリントを配布する時間がややかかるため、早めに教室に入りプリントの配布を行う。このとき、配るプリントは課題が書いてあるプリントと課題を解決するための文法事項が書いてあるプリントのみ配布する⁶。また、これは学生と接する機会を増やす

という意味もある。

③毎回授業の最初に、単語テスト（ペーパーテスト）を行う（日本語訳の問題、韓国・朝鮮語訳の問題などが含まれている）。（10分）

④単語テストが終わったら、その日に学ぶ予定の課題1・2・3を解決するために⁷、解説が必要な文法事項は簡単に解説を行う。（8分）

⑤その後、グループ毎に集まってもらい、課題1の文章⁸を辞書か携帯の辞書アプリを使い文章の内容を把握してもらう。そのとき、グループのリーダーを中心に役割分担をし、助け合いながらやるようにする。そして、役割分担し訳したものは、リーダーを中心にまとめるようにする。このとき、授業者は学生一人一人見て回りながら、分からないところと辞書を引いても出てこない単語、表現などは瞬時にフィードバックしていく。また、課題1の文章の日本語訳が終わったら、授業者に「終わりました」という報告をするように指示し、先に終わったグループは、次の課題2のところに移り、文章の日本語訳をするように指示する。（10分）

⑥全てのグループが終わる前に課題1の問題文のプリントを裏向きにし、各グループの指定場所に置いておく。そして、全てのグループが終わった時点で問題文のプリントを一斉に他のメンバーに配るようにする。（2分）

⑦その後は、早いもの勝ちで、問題文に対しての答えを先に手を挙げ答えてくれるグループを勝ちにする対戦式で行う⁹。その際、1番、2番、3番のように順番通りに答えなくても大丈夫である。つまり、分かる問題の答えから答えても構わないというルールである。（5分）

⑧その後、課題1の問題の答え合わせをし確認させる¹⁰。答えは韓国語で書く問題と選択式の問題と○か×かの問題と適切な答えにチェックを入れる問題などがある。（3分）

⑨同じ方法で課題2と課題3も行う。（⑤の2回分20分、⑦の2回分10分、⑧の2回分8分）

⑩次回まで覚えてくる単語の確認とともに授業者について2回音読させる。また、次回の授業の概略についてのアナウンスも行う。（4分）

⑪授業を終る直前に旅先で使える表現を教えている。例えば、「タクシー乗り場はどこですか？（テクシ タヌンゴシ オディエヨ?）」のような表現である。（1分）

⑫時間の都合によって、できる場合とできない場合があるが、パソコンを使ったPPT資料を用いて、日韓の文化の違い、現代社会事情、K-POPの歌などを紹介するようにしている。これは、異文化の存在に気づくことによって、韓国・朝鮮語という言語により深い興味を持ち、自律的な学習を促すことが目的である。（9分程度）

⁶ それ以外の問題文のプリントは授業自体が対戦式で行われるため、その都度問題を解く直前、グループ毎にグループの人数分を配布する。

⁷ 毎回三つの課題を解決させている。また、一つの課題に対して問題は三つずつある。希に2つある場合もある。これは、一回の授業で学ぶ新しい知識が多すぎると、やる気をなくしてしまう可能性が高いのを考慮したものである。

⁸ 課題一つに対しての訳してもらった文章の数は、大抵8から12くらいである。

⁹ グループのメンバー同士で力を合わせて問題を解決させ、尚且つ勝ち負けの対戦式で行うので、できるだけ達成感を感じさせるようにしている。

¹⁰ すぐ次の課題2に移らないで、各自頭の中で整理する時間を与える。

4. 「グループによる学習」とは

ここではいくつかの先行文献から「きょうどう」がどのように定義され捉えられているのかを考察したい。

「きょうどう」の表記には「協働」「協同」「共同」があり、「同調」や「協調」と表記されることもある。現在のところこれらが一定の定義によって使い分けられているとは言えない。関田（2004）は、「きょうどう」の使われ方が人によってさまざまであるとした上で、「協同」を「個々のグループのメンバーが、グループの全員が一つの目標を達成するために、共になくてはならぬ存在として活動し合っていく」こととしている。そして、「協同学習」というのは、「自分の学びというのが誰か（多くの場合、クラスメイト）の役に立つと同時に、誰かの隣の人や仲間の学びが自分の役にも立たないといけない」と述べている。それに対して、単に人を集めてグループを作るだけのグループ学習を「共同学習」と定義している。館岡（2005）は、「きょうどう」を「協働 (collaboration)」と表記し「互いに協力して何かを作り上げる創造的な活動を行うこととし、そこでは一人ではなしえなかった創発が起きる」としている。

また、Barkely, *et al.* (2005) を邦訳した安永 (2009) では、cooperative learning を「協同学習」、collaborative learning を「協調学習」と訳した上で、両者の違いについて紹介している。さらに、collaborative learning を「協働学習」と訳す例がある一方で、佐藤学 (2013) では、これを「協同的学び」と訳している。最近では減ったが、「共同学習」や「協力学習」といった表現もある。こうした用語や概念の規定は大切ではあるが、あまり細かく分けると議論が複雑になりすぎるので、本研究では、関田の立場を援用し「個々のグループのメンバーが、グループの全員が一つの目標を達成するために、共になくてはならぬ存在として活動し合っていく学習」を「グループによる学習」と呼ぶことにする。

5. 「グループによる学習」の成否

「グループによる学習」の成否は、グループのメンバーの一人一人が「同じゴールを目指している」という認識を抱き、責任をもって協力し合い、グループの目標に向かって貢献できるかどうかということにある。換言すれば、グループのメンバーの中に、自分のやるべきことを果たさずに、他のメンバーの努力をあてにし、成果のみをいただくという「ただ乗り」のメンバーがいれば、グループ全体の士気の低下を招き、学習そのものが崩壊しかねない。したがって、「グループによる学習」の成功の鍵は、「ただ乗り¹¹」をするメンバーを作らないことである。

6. 授業に「グループによる学習」の導入

「グループによる学習」が学習意欲の向上と授業の活性化に効果があると考えられるので

¹¹ 新井・坂倉 (2013:19) では、経済学の用語でフリーライダー（対価を支払わずに利益を得ようとする人）ということばを用いて、フリーライダーが増えると、グループ学習も同じようにうまく機能しなくなると述べている。

あれば、韓国・朝鮮語の読む・書くの授業にもよく採択されてもよさそうであるが、実際はそうでもない。確かに、コミュニケーションの授業では、ペアーワーク、ロールプレイ、スキットパフォーマンス、グループディスカッションなど、“グループによる活動”がよく見られるが、韓国・朝鮮語の読む・書くの授業ではグループを活用した学習法を見聞することはまだ少ない。反面、日本語教育においては、ピア・リーディング¹²ということばで、読むことを問題解決過程ととらえ、本来1人で行う読解活動を仲間と協働的に行うことを試みた研究がたくさん報告されている。

学習意欲の向上と授業の活性化をしたければ、文法メニューに続き読む・書くの授業でも「グループによる学習」を行うべきであろう。

7. 教室と座席

グループによる学習活動であるから、こじんまりと机をくっつけて一つの島を作ることになる。したがって、机と椅子が動ける教室が望ましい。ただ、机と椅子が固定式の教室であっても構成メンバーが4名以下の場合には前の席の者が後ろを向いたり、通路を挟んで向き合ったりして何とか可能であるが望ましくないと考えている。教室については、授業者が容易にグループに近づき答えの確認と瞬時にフィードバックができるような、スペースに余裕のある教室が好ましい。

実際、島根大学では前の学期の最後に次の学期の時の教室希望調査というのを行って、その際に授業者がグループ学習に向けた教室を希望し対応している。

8. グループの編成

「グループによる学習」でのグループの編成はどのようにグループをつくるかによって、その後のグループ活動の質が左右されるため、慎重に決めたい。考慮すべき項目は、グループの構成人数、グループ分けの方法、リーダーの選出と役割、グループ名の選出などがある。

8.1 グループの構成人数

グループにおいて適切に学習を進めるのに好ましい人数は学習環境と言語によって異なるであろうが、普通英語教育では10名を超えることはない。また、英語教育でのコミュニケーションのような授業では、広く情報が得られるし、ディスカッションも深みが増すが、その反面、各メンバーの発言量が減り、グループへの参加意識が弱まるであろう。人数が多ければその逆となる。

浅野(2002)は、「4～5名が好ましいが、6～8名でもなんとかやれる。3名は、全体の受講生数が20名以下で、グループ数がそれほど多くなならない場合に採用できる、ただ、とてもうまくいくグループができる一方で、一人が外れたり一人で請けおったりする場合

¹² 館岡(2000:25)では、ピア・リーディングとは学習者同士が助け合いながら問題解決を行い、テキストを理解していく読みの活動であるとしている。

のフォローしにくさがある。6名以上になると、グループから外れる学生が出はじめる。10名を超えるとグループ内グループができるか、ほぼ関与しない学生が1～3名出現するので、それへの対応にも苦慮することになる」としている。

しかし、島根大学の初修外国語の韓国・朝鮮語の授業では一クラス40名前後のクラスが多く、現状大概8名前後であるが、最高11名のグループのメンバーがいるクラスが三つのクラスのうち二つある。確かに、多すぎる部分もあるがまだ半年しか韓国・朝鮮語を習っていない学生たちにとって、三つの課題を解決するのに6名は一人一人の負担が大きく、8名前後が適切であると判断したい。また、授業自体が対戦式で先に手を挙げたチームにチャンスが与えられるので、グループを増やしメンバーの人数を減らすのは避けた。それは、グループ同士が同時に手を挙げた場合、じゃんけんで決めてもらうスタイルのため、グループが多くなればなるほど同時に手が挙がる確率が高くなるのを避けたかったからである。したがって、対戦式では4つのグループに分けた方が適切と判断した。さらに、2013年度の後期は筆者が担当している読む・書くメニューの学生の人数が多かったため、急遽、11名でも「グループによる学習」ができるように椅子に座ってやる人と座ったままではなく、参加できる位置に移動してやる人とに分けて全員参加するように工夫を凝らした。

8.2 グループ分けの方法

グループの分け方には、まず、フォーマル・グループとインフォーマル・グループに分けられるが、その日その場限りの課題を行うインフォーマル・グループは望ましくなく、授業者が行っている授業は半期にわたる共同作業が必要であるし、できるだけグループ間の偏りがないグループをつくるのが望ましい。なお、学生番号順、席が近いもの順、学部ごと順、成績順、様々な方法があるであろうが、韓国・朝鮮語の場合は初修外国語であるため、英語学習のように英語力を考慮した編成ではなく、各学部¹³ごとに、そして男女の割合と学年を考慮し均等に分けた方が適切と判断した。また、明らかにレベルが落ちるグループの場合は、中間試験の結果を見て授業者の判断のもと、少数ではあるものの瞬時にメンバー交代をおこなった。

8.3 グループのリーダーの選出とグループ名の選出

8.3.1 グループのリーダーの選出

グループによる学習には取りまとめ役のリーダーが必要であり、グループのメンバーの人数が多いほどリーダーの役割は重要である。最近では、「協同学習」などによく見られるように、各メンバーの公平な参加責任を重視し、リーダーシップも分け持たれるべきであるとの考え方が好ましいとされている。

本研究でのグループのリーダーの選出は、一回目の授業（オリエンテーション）の時に

¹³ 島根大学の2012年度までは、学部ごとの韓国・朝鮮語の成績順が法文学部、教育学部、生物資源学部、総合理工学部の順であった。なお、医学部は2013年度から韓国・朝鮮語がスタートしたため、ここには入っていない。

グループ分けをし、メンバー同士で話し合っ決めてもらっている。しかし、グループによる学習をやっていくうちに、能力の高い学生がリーダー役をするように促している。それは、初修外国語の韓国・朝鮮語の授業では言語習得を目標とするものなので、グループ内の能力の差は歴然としており、能力の高いメンバーが能力の低いメンバーに刺激を与えたり、アドバイスをしたり、教えたりするという方法を取る方が好ましいと判断したからである。

8.3.2 グループ名の選出

グループ名の選出はグループのリーダーの選出と同様で、一回目の授業（オリエンテーション）の時にグループ分けをし、メンバー同士で話し合っ決めてもらっている。このとき、せっかくなので韓国と韓国・朝鮮語に関連するものに限って決めてもらうことにしている¹⁴。例えば、「オルチャン（イケメンという意味）」、「ビビンバ（ピピムパブ）」、「コチュジャン」、「スンドゥブ」、「トッポギ（トクポッキ）」のようなものがある。毎回の授業の時にグループ名で呼ばれるので、この単語だけは時間が経っても記憶に残るし覚えられるからである。

9. グループ間の競争

教育の現場ではあからさまな競争はタブー視する部分もあるかもしれないが、ある程度の競争は学習者に刺激を与え、やる気を出せるようにするので学習意欲の向上と授業の活性化により起爆剤と考えている。また、一人一人ではなくグループ間の競争は人間関係が気まづくなる恐れもないし、学習者はゲーム感覚で楽しく学習できるのであろう。

さらに、日本人であれば他人に迷惑をかけたくないという気持ちが強いのと、誰しも負けたくないという人間本来の気持ちはあると思うので、筆者はその点を良い意味で利用したいと考えている。

10. 「グループによる学習」での留意点

「グループによる学習」での留意点は、岡坂（1991）にも述べられているように、「授業者は、グループによる学習においていったい何を目標とするのか」である。つまり、学習者に学習目標と達成目標をしっかりと説明する必要があるし、学習者が何をすべきかがはっきり分かるように具体的な教示が大切である。

11. 「グループ学習による読む・書く」の授業の実際の様子¹⁵

この節では、「読む・書く」の授業を実際どういうふうに行っているかを紹介したい。以下の写真 1.2 を参照していただきたい。学習者たちが机をくっつけて一つの島を作り、携

¹⁴ 常にモチベーションを高くして、韓国・朝鮮語モードになってもらうためでもある。

¹⁵ 一回目の授業の時に学習者たちに学会の発表と論文執筆以外には一切使わないことを約束し、撮影の許可をもらって動画の撮影と静止画を撮っている。

携帯電話を使って文章を訳していることが確認できると思う。



写真1



写真2

12. 「グループによる学習」に対する学習者の評価

学習者に「グループによる学習」について、次のような項目を設けてアンケート¹⁶形式で尋ねたところ、以下のような結果を得た。回答者の合計は114名（男：66名、女：48名）で、質問2と質問3は複数回答である。

表1「グループによる学習」の可否

質問1 「読む・書く」の授業に「グループによる学習」は？	回答数	%
①よい	103	90.4%
②よくない	1	0.9%
③どちらとも言えない	10	8.8%

上記の表1から分かるように、「読む・書く」の授業に「グループによる学習」の導入を「よい」と答えたものが全体の9割を超えていることが観察された。また、「どちらとも言えない」を合わせると99%にも達していることになり、この学習法が学習者に圧倒的に支持を得ていることが分かるかと思う。

表2「グループによる学習」を「よい」とする理由

質問2 質問1で①または③と答えた人、その理由は？	回答数	%
①従来と違う方法で面白いから	32	13.0%
②リラックスした雰囲気楽しく学習できるから	57	23.2%
③話し合ううちに韓国・朝鮮語（内容）に関する興味を深めるから	14	5.7%
④友達と協力してやれるから	55	22.4%
⑤友達同士で互いに分からない点など聞きやすいから	45	18.3%
⑥刺激を受けて、よく学習するようになるから	14	5.7%
⑦対戦式なのでやる気が出るから	24	9.8%
⑧その他（具体的に書いてください）	5	2.0%
●みんなのためにやらないといけないと思うので必死になってしまう。		
●グループで行うと、少し他人任せになるときがあることが欠点だと思うので、それさえなければグループ学習はいいものになると思うので、自分で積極的に行うようにしたい。		
●ともだちができたから。		
●授業に集中できるから。		
●班の人が多すぎてうまくコミュニケーションがとれない。		

¹⁶ 本研究でのアンケート用紙の内容は、高橋寿夫（2008）のアンケート用紙を援用し筆者が修正・加筆したものである。

上記の表2から分かるように、「読む・書く」の授業に「グループによる学習」を「よい」とする第一理由として23%も占めている、「リラックスした雰囲気楽しく学習できるから」を挙げていることが分かった。これは、林(2014)の「文法」の授業での結果と同様で「リラックスして楽しく学習できる」という授業環境により、学習者は緊張感から解放され、自発的に学習に取り組むことができ、学習意欲も高まって授業の活性化にも繋がったと思われる。つまり、グループ学習による「文法」の授業の結果を裏付ける結果とも言えるだろう。

次に、第二の理由として、「友達と協力してやれるから」が第一の理由とほぼ互角の22%であることが確認された。これも、「文法」の授業での結果と同様で「グループによる学習」の特徴の一つで、「社会性を育む」という意味合いがある。協力しないと他の人に迷惑をかけてしまうという心構えから積極的に授業への参加にも繋がり、それが授業全体の活性化を生むのである。また、一人で学習するより、気軽に組み合わせて楽しく学習できるからであると考えられる。

「文法」の授業での結果と違うところは、「文法」の授業での第三位「対戦式なのでやる気が出るから(15.3%)」、第四位「従来と違う方法で面白いから(14.5%)」に対し、「読む・書く」の授業での第三位、第四位は「友達同士で互いに分からない点など聞きやすいから(18.3%)」と「従来と違う方法で面白いから(13.0%)」であった。これは、「読む・書く」の授業の特徴上、辞書を引いても出てこない単語と表現などを仲間に聞きやすい授業環境が影響したのではないかと思われる。

これを裏付ける学生の自由コメントを以下に一部紹介する。

- 分からないところを友達にききやすくていいです。みんなで楽しくできるところもいいと思いました。
- 他学部の人とも活動できることが良いです。
- 友だちもできたし、楽しみながら学べるのでとても楽しい授業です。
- わからないところを教えてもらえるのでやりやすいし、グループで自分の担当のところはしっかりがんばろうと思える。
- 楽しく受けられるのでいいと思います。
- 授業が楽しくて勉強もできるのでいいと思います。
- 分からない部分を友達同士で教え合うのがとても良かったです。
- 自分一人ではわからないことも、他の人がいればできるようになるし、楽しく学習できて良い。

しかし、「読む・書く」の授業に「グループによる学習」を「よい」とするものの、その他の意見として、以下のようなコメントもあった。このグループの人数編成については今後改善の余地がある。また、「みんなのためにやらないといけないと思うので必死になってしまう」というコメントについては勝ち負けの成績基準¹⁷の更なる工夫と個人個人のフィ

ードバックにも気を配る必要があると思われる。

- みんなのためにやらないといけないと思うので必死になってしまう。
- 班の人が多すぎてうまくコミュニケーションがとれない。

表3「グループによる学習」を「よくない」とする理由

質問3 質問1で②または③と答えた人、その理由は？	回答数	%
①訳読による一斉授業の方が慣れているから	2	50.0%
②友達間の勉強では不安だから		
③グループで学習する自体が好きではなく、なじめないから	1	25.0%
④時間をかける割には能率が上がらないから		
⑤先生に当てられる心配もなく、サボるようになるから		
⑥グループに協調性がなく、覇気にかけるから	1	25.0%
⑦グループのメンバーが気に入らなくてやる気が出ないから		
⑧その他（具体的に書いてください）		

上記の表3から分かるように、「読む・書く」の授業に「グループによる学習」の導入を「よくない」とする第一理由として、「訳読による一斉授業の方が慣れているから」を挙げていることが分かった。これは、そもそも「グループによる学習」の導入を「よくない」と答えた人は114人うち1人だけであったし、学習意欲の向上と授業の活性化のためには多少の犠牲はやむを得ないことであると考えている。しかし、これに関しては、今後更なる工夫と改善が必要であるし、授業者が常に気をつけなければならないことであると思われる。

表4「グループ間の競争」の可否

質問4 「読む・書く」の授業にグループ間の競争は？	回答数	%
①よい	79	69.3%
②よくない	3	2.6%
③どちらとも言えない	32	28.1%

上記の表4から分かるように、「読む・書く」の授業に「グループ間の競争」を「よい」とする答えが7割近くを占めているのが分かるだろう。これは、学習にあたって適度な競争は学習者に刺激を与え、やる気を起こさせ、学習意欲の向上と授業の活性化にも繋がる

¹⁷ 島根大学の初修外国語の成績をつける場合、中間試験が40点、期末試験が40点、平常点が20点で100点満点にする。この平常点は授業者が決められるものであり、授業者によってわずかではあるが配点も様々である。そのうち、筆者の場合は単語テスト（小テスト）が10点、出席点が5点、普段の授業態度が5点である。この普段の授業態度のうち、1点がグループ対戦による点数である。点数のつけ方は、4つのグループのうち、期末試験前まで一位になった回数が多いグループが一位、一番少なかったグループがビリとなり、一位グループは平常点から+1点、ビリグループは平常点からマイナス1点となる。三位、四位のグループは成績のプラス、マイナスはなしである。

ということ裏付けていることになるのである。「どちらとも言えない」まで合わせると、97%を上回る。つまり、この対戦式の学習法が学習者に受け入れられている証拠とも言えるであろう。ただし、点数で競い合う限りは、採点は公正に行わなければならないが、他の人に馴染めない、対戦式に向いていない学習者に対しては的確な採点をするのが難しいところがある。これに点に関しては、更なる改善と工夫が必要であると考えている。「文法」の授業と違うところは、「グループ間の競争」を「よい」とする答えが75.8%あったのに対して、「読む・書く」の授業では7割を若干下回る結果となった。これに関しては、競争させるやり方と成績のつけ方に更なる工夫と検討の余地があると思われる。

表5「グループによる学習は勉強（理解）に役に立ったかどうかについて」

質問5 「読む・書く」の授業に「グループによる学習」は役に立ったかどうか？	回答数	%
①役に立った	94	82.5%
②役に立っていない	1	0.9%
③どちらとも言えない	19	16.7%

「読む・書く」の授業に「グループによる学習」は勉強に役に立ったかどうかについての質問の結果は、上記の表5から分かるように、「役に立った」と答えた学習者の割合が約8割を上回っていることが確認できた。これは、筆者が実際におこなったグループによる学習法が、学習者の韓国・朝鮮語に対する学習意欲の向上と授業の活性化に役に立つ学習法であることを裏付けている。「文法」の授業での「役に立った」の結果である69.7%をはるかに上回る結果となった。

以上の結果を踏まえてみると、更なる工夫、検討、改善すべき部分は多々あるものの、「グループによる学習（対戦式）」が韓国・朝鮮語の「読む・書く」という授業に対する学習意欲の向上と授業の活性化に有効であることを示唆していることになる。なお、「文法」の授業での結果も裏付けていることになるのである。

13. 学習者の自由コメント

アンケートに併せて「グループによる学習」を体験してみたの、率直なコメント（感想、要望など）を書かせたが、そのすべてを抜粋して以下に紹介する。

< positive 的なコメント >

- 他の人がどのような学習の仕方をしているのか分かり、個々で学習する時よりも、グループでやる方がグループ間の距離が縮まりよいと思った。
- 早く調べられるようになった。ハンゲルを早くケータイでうてるようになった。
- 1じゃ韓国・朝鮮語は絶対再履修です。その点はグループワークはたすかります。
- 楽しめました。

- みんなでやるから楽しいし教えあえるのがいい。
- 楽しいのでこのままでいいと思います！
- 大変な作業だけど、最後のグループ対戦のために頑張ろうと思えるので、グループ学習は為になると思う！
- 眠たくなることなく楽しくやれる。
- 眠くならない。関わりが増えて嬉しい。
- 友だちも増えて楽しいです。
- これからも授業がんばりたいです。
- いいと思う。
- 方法としてはおもしろいので続けて行くべき！
- 他学部の人と知り合いになれる。一人では分からないところを友人に聞ける。
- グループ内に自分よりできる人がいたら追いつきたくないので勉強が進みます。
- これからもたのしい授業お願いします。
- 分からない所を聞けるから、韓国・朝鮮語を学びやすい。
- 皆で頑張れる。
- 新しいかんじで楽しいです。気軽に聞けるので助かります。
- グループだと一人分の量がすくないがみんなで協力してやると頭にのこりやすい。
- 楽しい。
- 分からないところなど、すぐに聞くことができるからいいと思う。
- 自分がつくった訳だけでは、自信がないので、友達の見聞を聞きながらやるのがよかったなあと思いました。
- 韓国・朝鮮語を学ぶことがとても楽しいと感じるようになりました。楽しい友人もでき、この授業でグループ学習することで韓国の文化など、一緒に話をして知識を深めることができるので、とても良いと思いました。
- 協力することができて、仲も深めることができていると思います。
- 速読がほんの少しできるようになった。協力しあうことができた。
- みんなで協力しあえるのでいいと思います。
- 楽しくできるので良いと思う。
- 他の学部の人と交流がもてるのがいい。
- 色々な人と話せるし、仲良くなるので良かったです。グループ学習は続けるべきだと思います。
- 楽しいので、あっという間に時間がすぎてとってもいいと思います！！一緒に講義をうけていても、知らない人がたくさんいるので、いろんな人と一緒にグループ学習してみたいです。
- 自分のミスなどを他の人達に教えてもらったりと勉学に更に意欲がわきました。一人よがりでもかきこくなることは不可能なのかなと感じました。
- グループのなかで話し合うなどして楽しく授業できるのでよいと思った。

- わからないところを気軽に聞きあえるし、1人で机に向かって授業をうけるより楽しい。
- グループ学習なので、よりまじめに授業に取り組みました。
- 今後もグループ学習をしてほしいです。
- 自分は初対面の人と話すのは苦手だけど、話す、きっかけになっていて、とても楽しんでます。
- 楽しく勉強できるのでグループ授業は個人的に好きです！
- グループ学習の方がやる気ができるので、授業内容が印象に残るのでよかった。
- 授業中に分からないところをすぐグループの仲間に聞けるのが良いと思います。
- みんなで単語や文法を調べ合うことで、頭に入ってきやすかったです。また協力するので、競争が楽しかったです。
- 楽しかったです。韓国・朝鮮語が前期に比べてすごく読めるようになっておもしろい。単語も自然と覚えられました。
- グループの人と仲良く協力して学習できるので、韓国・朝鮮語がより身近に感じられて良いです。
- 楽しいし、協力して出来るのでいいです！！
- 楽しく学べ、そしてわからない所も友だちが教えてくれて、学びやすい環境だなと思います。
- 勉強しないといけないと思わされるので、とてもいいと思います。
- 対戦式だと集中して勉強ができていいです。
- 授業がスムーズに進行できたので良かったです。

< negative 的なコメント >

- 自分があまり挙手したりできないので、チームに貢献できないと思います。
- 授業としては楽しいが、この授業でのグループ学習はあまり好きではない。
- あまり理解できていなくても、雰囲氣的にまだ訳せてないとかいいにくいです。
- 自分で調べて、訳しそれを共有することはいいことだと思う。けれども毎時間グループ学習ではなく、普通の授業も挟んだほうがよいと思った。
- スピーディーに答えられるのが理想だけど、得意な人しか解答できていないように思う。
- 班に出来る人がいるとその人に頼りきりになりがちになってしまう。
- グループ活動は従来とちがう方法で楽しいが、文章読解で解けなかったときに他人の足手まといになりそうでこわい。
- 少しグループの人数が多いと思った。

< 要求事項 >

- 今使っている韓国・朝鮮語のアプリが12月18日でサービスを終了するらしいので、他の良いアプリを見つけておいて下さい¹⁸。

14. まとめ

「文法」の授業に引き続き、今回韓国・朝鮮語の「読む・書く」の授業にも「グループによる学習」を取り入れておこなってみた。その結果、「文法」の授業のときと同様に、「グループのメンバー編成方法」、「成績に反映する方法」、「他人任せになりがち」、「スピーディーに答えなければ勝てない」など、グループによる学習活動内のありかたについて改善すべき点は多々あるものの、文章の解釈と理解には多少の効果があることが示唆された。また、「グループによる学習法」は教室を活気づけることに貢献する傍ら、ゲーム感覚で楽しく友達と協力し、分からないところは聞きながら自発的に学習できると確信した。こうしたことから、「グループによる学習」を韓国・朝鮮語に対する教室での授業に取り入れる意義は大いにあると思われる。

しかし、「グループによる学習」は学習意欲の向上と授業の活性化には効果がある学習法であるが、気をつけなければならない点もある。それは、「文法」の授業と同様、学力の保障である。つまり、この学習法により学習者の学力がよく伸びていることが保障されなくてはならないのである。また、学習者の自由コメントにもあったように、「出来る人がいるとその人に頼りきりになりがちになってしまう」ところも改善の余地がある部分である。今後、本学習法での改善すべき点を修正しつつ、他のメニュー（会話、聞き取り）の授業についても研究を続けていきたい。なお、学力保障の問題についても継続して取り組んでいきたい。

参考文献

- Barkely, E. F., Cross, K. P., & Major, C. H.(2005).*Collaborative Learning Techniques:A Handbook for College Faculty*. (安永 悟 (監訳) (2009).『協同学習の技法—大学教育の手引き』ナカニシヤ出版).
- 浅野 誠 (2002).『授業のワザ—挙公開—大学生生き残りを突破する授業づくり』104-127, 大月書店.
- 新井和広・坂倉杏介 (2013).『グループ学習入門：学びあう場づくりの技法』慶應義塾大学出版会
- 岡坂慎二 (1991).『グループ学習の技術 (教育技術文庫)』明治図書出版.
- 佐藤 学 (2013).「学びの共同体の改革=これからの課題」(学びの共同体・夏の合宿研究会 in 伊東2013年7月26日)<http://manabi.justhpb.jp/13-S-1.pdf>(2013年12月24日検索).
- 関田一彦 (2004).「協同学習のおすすめ—互いの学びを気遣い合う授業を目指して」杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (編).『大学授業を活性化する方法 (高等教育シリーズ)』57-106, 玉川大学出版部.
- 高橋寿夫(2008).「授業の活性化に向けて—グループによる学生参加型授業の実践的考察—」『関西大学外国語学部 外国語教育フォーラム』7,23-34.

¹⁸ 直ちに、新しいアプリを探し出して紹介し対応した。アプリの詳細については前述した脚注5を参照していただきたい。

- 舘岡洋子 (2000). 「読解過程における学習者間の相互作用—ピア・リーディングの可能性をめぐって—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』 23, 25-50.
- 舘岡洋子 (2005). 『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』 東洋大学出版会.
- 林河運 (2014). 「韓国語学習者の意欲向上を目的とする学習法の試みとその検討—グループによる学習に注目して—」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第 9 号, 119-133.